

シンポジウム 13（公募）：在宅療養を支援する病床

演題名	地域の在宅医療を支える有床診療所の役割と要件～当院の入院実績の分析から～
-----	--------------------------------------

概要

<目的>

当院は開院以来、地域の在宅医療のバックベッドとして一定の役割を担ってきた。当院の入院患者の分析を通して、地域の在宅医療を支える有床診療所に求められる役割と要件を検討する。

<方法>

2009年1月1日～2013年6月30日の延べ入院710件（患者数445名）を対象に①入院前の療養場所、②退院後の療養場所、③入院目的、④原疾患、⑤原疾患に占めるがん、非がんの割合を分析した。

<結果>

①入院前の療養場所は在宅（施設を含む）580件、病院130件であった。在宅の内訳は機能強化型を組む当院を含めた4つの在宅療養支援診療所からの紹介が477件、地域の連携先からの紹介が103件であった。②退院後の療養場所は在宅（施設を含む）434件、病院35件、病棟看取りは241件であった。③入院目的はショートステイ（レスパイトを含む）304件、ホスピスケア231件、治療135件、トランジット34件、その他6件で、複数の目的で病棟利用した患者も多数いた。④対象患者445名の原疾患では肺がん54名、胃がん30名、脳梗塞後遺症29名、肺炎25名、膵がん14名、大腸がん、乳がん各13名、その他ALSやパーキンソン病などの神経難病も認められた。⑤原疾患に占めるがん、非がんの割合はがん54%（240名）に対して非がん46%（205名）であった。

<考察>

①入院件数全体の80%以上が在宅からの入院であり、②そのうち約60%は退院後に在宅復帰していることが分かった。また病棟看取りは入院件数全体の約35%である。③入院目的はレスパイトを含むショートステイから治療、看取りまで幅広い。④患者の原疾患は急性期疾患から慢性期疾患まで様々であり、求められる治療やケアの異なるこうした患者の混在が受け入れ側の対応をより複雑にしている。⑤対象患者の原疾患では半数以上が「がん」で、緩和ケアのニーズが大きいことが分かった。

<結論>

有床診療所が在宅医療のバックベッドとして多様なニーズに応えていくためにはまず、病棟医師、看護師の在宅医療に対する理解が不可欠である（①②）。また様々な疾患に対応できる知識と技術を持ったチームの形成が必要であり（③④）、緩和ケアなどの新たな専門分野を習得できる教育体制の整備が望まれる（④⑤）。有床診療所のこうした現状を正確に理解してもらうための情報発信や、自らも絶えず地域のニーズを意識し、受け入れの幅を広げて行く姿勢もまた“在宅療養を支える病床”という役割を担って行く上で非常に重要である。